

佐久の先人たち⑤③

戦後、佐久工業界の起業パイオニア

かし やま まこと  
**榎山 信**

(1913~1979年)



戦後、佐久において多くの企業が創業した。先陣を切り合理的な工場経営モデルを示し、工業界のリーダーシップをとり、ブレーキシューを世界的なブランドに作り上げた。

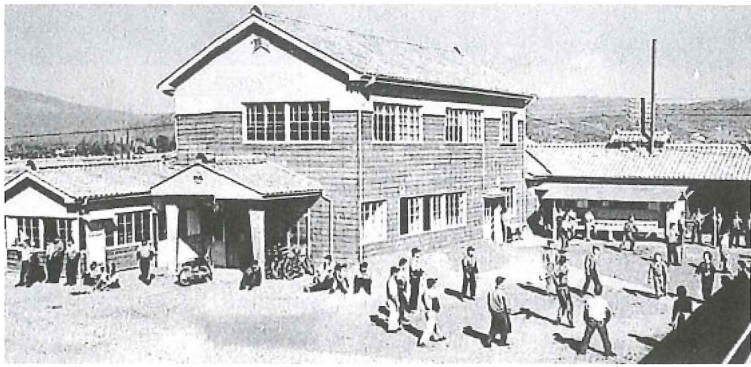
● 佐久の工業の出発点に立つ

榎山信は、一九二二(大正二)年前山村(現佐久市前山)に生まれた。旧制野沢中学校(現野沢北高校)を卒業し、北牧小学校(現小海町小海小)で代用教員を勤めたが、一九才で上京、自動車部品販売店に勤め、やがて独立して榎山商店を名乗り、自動車部品業界に一歩を踏み出した。

当時東京には、部品販売業では最大手のエンパイヤ自動車があった。小諸の柳田一族の柳田諒三が

再開し、一九五〇年からの朝鮮戦争による特需もあり、工業の基礎が築かれた。疎開工場から機械を買い取り、その技術と人脈を生かして生産規模の拡大と新製品を開発していく手法は、戦後の佐久の工場起業のモデルであり、榎山はその先駆者であった。

一九六〇年に、榎山プレス工業とプラスチック樹脂の中央樹脂工業を設立し、榎山工業は弟の理一郎が経営することとなった。榎山プレスは、エンパイヤ自動車の岩波の示唆ではじめたブレーキシュー(回転する車軸を挟んで車を止めるブレーキシューの一部、摩擦でシューが減るので修理に必要な重要部品)が高い



昭和30年代の取出工場(廃校になった小学校校舎を移築した)

評価を得、エンパイヤ自動車にとっても榎山の名付けたMKブランドのブレーキシューは有力な販売アイテムとなった。一方、中央樹脂工業は東京都墨田区にある吉田工業の社長吉田重喜の依頼により資生堂の化粧品容器

一九一三年日本橋で創業した会社で、佐久から多くの人々が就職していた。榎山はトラック、バスの修理部品をそこから仕入れ、奉天(現中国瀋陽市)や台北に滞在しながら、満州(現中国東北部)や台湾に輸出した。軍需もあり商売は順調だった。

まさ子夫人とは台北で一九四一年に結婚する。エンパイヤ自動車で、大沢村(現佐久市大沢)出身の同世代の岩波角平と知り合い、二人は終生の友となる。岩波は一九七三年から二年間にわたってエンパイヤ自動車の社長を務めた。昭和10年代、自動車産業は発展していく工業社会を象徴する彼らの夢であった。

榎山は一九四三年に召集され静岡連隊に配属となったが、戦地に行く前に終戦となり、一九四五年一月三歳のとき、故郷佐久に復員してきた。翌年の五月、野沢の南町(現佐久市原)に榎山商店を開く。東京のエンパイヤ自動車などの商社から修理部品を仕入れて佐久で売ること、また佐久の地元で製造した自動車部品を東京の商社経由で売ることが計画した。仕入れと販売に同じルートを使う考えである。

国内はバス、トラックが走り始めたころで、地元ではそれほど売れるわけではなかったが、全国の修理部品となれば作れば売れる。榎山は疎開していた国枝合金という鋳物会社を持っていた銅合金(摩耗に強く軸受けに使われた、砲金ともいって)で、車体

の加工をはじめ、のちに長野吉田工業と社名を変える。

一九七八年には、金型専門の榎山金型工業を独立させる。プレスもプラスチックも金型が品質を決める。それを他者に任せておけないというのが信念である。榎山は今の仕事を守りながら常に新しい分野への進出を企画していた。

● 地域工業発展の礎

榎山は地域の工業発展にリーダーシップを発揮した。名称をかえて新築された長野県佐久職業訓練所現長野県佐久技術専門学校へ機械を寄付して充実に努め、工業会のとりのまに一九六一年佐久市工場協会を立ちあげた。また、工場経営に品質管理と合理的経営を取り入れるよう提唱、工場協会は一九七四年に佐久市と共催で「わが社の合理化事例発表会」を始め、行政が参加する研修発表会はまだ珍しかった。

彼の手腕は佐久市の工場誘致にも発揮された。「金の卵」として青年層が都会に集団就職していく時代、地元復興のため工場を誘致しようとの動きが出てきた。工業界には「大手工場が来たら労働者が集まらなくなる」という反対もあったが、榎山を中心に地元工場を説得し、東京トランジスタラジオに続き、市の悲願ともいえる大規模工場、TDK磁気テープ工場の誘致に成功したのである。

岩村田・中込・野沢・東村商工会は一九六五年に



軸受け(ブッシュ)

を支える板バネの軸受け(ブッシュ)を作らせた。デコボコ道だから摩擦に強い銅合金でもすぐに減る。榎山は本格的に製造拠点を造ることにした。一九五〇年南佐久金

● 疎開工場と佐久の発展

一九五四(昭和29)年、疎開中の東京工業(大蔵省所有、のちTDK社長となり佐久市進出に寄与する)のプレス機器及び菊池合金の設備を手に入れ、野沢の取出に土地を買って、工場を造った。佐久には津上製作所をはじめ高見沢電機、双信電機など大小たくさん疎開工場があった。終戦でいったん工場を閉めたが、やがて民需製品として、津上製作所はミシン、高見沢電機はリレー(継電器)、双信電機はコンデンサーを作り始めた。佐久の戦後の工業は、疎開工場を抜きにしては語れず、特にこれら3社はその後佐久地域に仕事と技術と人材を輩出していく。

地元のいくつかの会社が疎開工場の機械を買い取り、起業していった。佐久に残っていた疎開工場も合併して佐久市商工会を設立し、長年の願望であった商工会議所を作る。榎山は工業界から協力した。一九六八年に商工会主催の「第一回工業展」を開催した。両者の協力の下に通商産業省(現経済産業省)の認可を得て、一九七〇年に佐久商工会議所が発足し、榎山は二代目の会頭に就任したが、病に倒れ、一九七九年六六歳で亡くなった。その後工業展は試行錯誤を重ね、現在、全商工部門や大学、牧場などの参加する開かれた「さく市」へと発展した。

ブッシュから始まった榎山工業は水中ポンプ、スノーマシン、真空ポンプと技術開発を続け、いま半導体液晶向け真空ポンプでは世界第2位のシェアを誇り、年商一六八億円(二〇一四年度)。一方榎山プレス工業はその後エムケーカシヤマと社名を変え、長野吉田工業やグループ一〇社で年商一七〇億円となり、両グループとも地域の中核企業に発展している。

(高橋武彦)

○ 参考文献

- 佐久市志編纂委員会「佐久市史」第四巻 一九九六
- 佐久市志編纂委員会「佐久市史」第五巻 二〇〇三
- 白田町誌編纂委員会「白田町誌」近現代編 二〇〇九
- 北佐久郡志編纂委員会「北佐久郡志」第三巻 一九八三